

18 世紀ロシアのキリスト教に接した 漂流民の記述の特徴

稲垣 滋子

1. はじめに

本稿では、18 世紀ロシアへの漂流民が遺した文献に見られる訳語を材料として、異文化に接した漂流民が、ロシアのキリスト教や人間の生き方をどのようにとらえたかを考察する。

江戸時代、日本各地の港から江戸・大阪に向けて出帆した商船が嵐に遭って難破し、漂流してロシアの東端カムチャツカに漂着する事件が相次いで起こった。これらについての日本側の記録はずっと後になるが、ロシア側では 1700 年ごろから、漂流民についての記録を残している¹⁾。それらをたどってみると、1696 年漂着の大阪の商人伝兵衛、1710 年漂着のサニマ(三右衛門とも。出身地は不明)、1729 年漂着の薩摩出身のゴンザとソウザ、1745 年漂着の南部(下北半島)出身の徳兵衛一行、1789 年漂着の伊勢出身の大黒屋光太夫一行となる。いずれも首都ペテルブルクに送られ、当時の皇帝(ピョートル大帝、アンナ・ヨアノヴナ女帝、エカテリーナ II 世など)に謁見し、日本の事情を説明している。また伝兵衛・サニマ・ゴンザ・ソウザ、および光太夫一行の中の 2 名はロシア正教の洗礼を受けた。上記漂流民のうち日本に帰国したのは、大黒屋光太夫とその配下 1 名のみである。

これら漂流民は、意志に反して他国に漂着し、異なる政治体制、社会、風土、人々に接したもので、それらについての情報をあらかじめ持っていたわけではない。漂流中の不安や恐怖、漂着時の驚き、その後の適応(あるいは不適応)という過程を通して、彼らの心の中がどのように動いて行ったか、さらに、漂流民を迎えたロシア社会はどのように反応したかについて探ることは、日本人の心の歴史を明らかにするために必要なことであろう。その研究にはいろいろな側面が考えられるが、ここでは先ず、漂流民の接していた母国の宗教との違い、それに伴う生き方の違いをどうとらえたかを考えてみたい。本稿では彼らが記述した資料のうち、ロシア語からの訳語を手がかりに、その一端に触れてみたいと思う。

漂流民のうち、彼ら自身の手で記録を遺したのは、ゴンザと大黒屋光太夫の 2 名と、徳兵衛一行のうちの三之助の息子であるタターリノフである。ゴンザは、指導者であったボグダーノフの記したロシア語を日本語(薩摩の言葉)に訳して、手書きによって 6 種の書物(『項目別露日単語集』1736 年、『日本語会話入門』1736 年、『新スラヴ・日本語辞典』1738 年、『簡略日本文法』1738 年、『友好会話手本集』1739 年、『世界図絵』1739 年)を著した。タターリノフはやは

り手書きで、『レクシコン』とそれに付随する『会話篇』を著した。光太夫は、自身で書いた膨大な記録を日本に持ち帰り、それを基に語ったものが、聞き書きをした蘭学者桂川甫周によって『北槎聞略』という書物になった。3人のアイデンティティのあり方を推測してみると、次のように言える。ゴンザは少年期に漂着したため異文化への適応が早かった。タターリノフは漂流民とロシア女性との子供として、両国のはざまにあった。光太夫は成人で教養もあったため、日本人としてのアイデンティティを失わず、自分の言葉で記録し語った。

以下に、漂流民をめぐる時代背景と、訳語の特徴について順次述べていくことにする。

2. 時代背景

18世紀の日本は、元禄から寛政までの江戸時代中期に当たる。この時代には、京都・大阪・江戸への物資の海上輸送が非常に盛んであった。このことは、日本人の性格づけによく用いられる、島国に生きる農耕民族としての閉鎖性という常識に反して、異文化との接触場面の多さを推測させる。網野(1998 他)は、「海民」という用語によって、日本の漁業、製塩、廻船に携わる人々を位置づけており、海民は国内の文化の運び手であり、外国との交易を通じて開かれた意識を推測させるとしている。この視点は、日本人の心の歴史をたどるための新たな論点となることが予想される。筆者は、大黒屋光太夫の事蹟に初めて触れたとき、その沈着な態度や判断力が信じがたかったのであるが、その後、網野ほかによる一連の海上交通の研究を知って、新たな視野が開けた思いがしたのである。

漂流民の海上交通については、船の建造、航海法に関しても記すべきであるが、ここでは本稿の主目的である、彼らの信仰の対象について簡単に述べておくことにしたい。北見(1984 p. 305)は、南蛮船渡来以来取り入れようとした科学的航海法と、信仰に支えられた一見非合理的な世界とが融合しているのが近世の航海の特徴であると言っている。その信仰とは、金比羅信仰や住吉信仰(守屋 1987)、海上から見る「山アテ」²⁾としての霊山(北見 1984)、船霊(フナダマ)信仰などである。船霊信仰は、航海の安全を祈って船内にご神体を祀るもので、野口(1983 p. 409)によると、全国的に共通点が多いという。ご神体としては、男女一対の人形、女の髪の毛、賽銭、五穀などを納める。このほか漁民にはエビス信仰もある。大黒屋光太夫の『北槎聞略』にも、嵐に遭って破船しそうになった場面で、「船中の者とも皆々髻を断、船魂に備へ、おもひおもひに日頃念ずる神仏に祈誓をかけ、命かきりに働けども」(亀井・村山 1965 p. 7)のように記されている。この光太夫の記述を見ると、乗組員は日頃それぞれに何らかの信仰を持っていたことがわかる。

ここに一つの疑問が生じる。それは、ゴンザや光太夫は、16世紀から17世紀初頭にかけて日本に渡来したキリスト教について知っていたかどうかということである。これは推測にすぎないが、薩摩に生まれ、まだ少年期に入ったばかりのゴンザは、そういったことはまったく知らなかったのではないか。ゴンザより200年前の鉄砲伝来も、それに続くザビエルのキリスト教伝道も大人たちの語り種となっていたに違いないが、ゴンザの周りの宗教的生活には関係な

かったであろう。また光太夫は、キリシタン大名などは知識としてはあったかもしれないが、例えばロドリゲスの文法書やいわゆるキリシタン物については知らなかったのではないかとと思われる。もしも自分の生活にキリスト教が関係していたならば、『北槎聞略』の中に、それらしい表現が自然に出ているはずであるが、そういったことは見いだせないからである。

次に、漂流民が会ったロシア社会について概観してみる。この時代は、欧米においては、英仏戦争とその和平、イギリス産業革命、アメリカの独立、フランス革命などが起こり、ロシアでもトルコとの戦争、クリミア戦争、ポーランド分割など大きな動きが見られた。こうした中で、ピョートル大帝は首都をモスクワからペテルブルクに移し、西欧化政策を推進し、一方東方進出をも目指した。それを受けた女帝アンナ・ヨアノヴナの治世下に、ゴンザとソウザが漂着したのである。その54年後、エカテリーナII世のときに大黒屋光太夫一行が漂着している。

このころのロシアではロシア正教が定着し、公文書などには教会スラヴ語が用いられていた。しかし中世に民衆の間に浸透していた聖ニコラ信仰も残っており、聖なるものと悪魔的なものとの混在が認められる(白石 1997 p. 10)。農民が拠り所としていた異教ともキリスト教ともつかぬ信仰の特徴は、上記白石によれば、19世紀においても、自然崇拜、精霊信仰、死霊・祖先崇拜、悪魔崇拜、呪術的迷信などの俗信に見られる(同書 pp. 132-133)。祖先崇拜の精神は今も生きているらしく、筆者はモスクワのいくつかの墓地に文学者の墓を訪ねた折り、墓石の前にしつらえたベンチで、静かに墓に語りかけている人の姿を何度か見かけた。

3. ゴンザと光太夫の異文化との出会い

上記のようなロシアに足を踏み入れた漂流民は、自己の世界との違いをどのように受け止めたであろうか。以下に、彼らの足取りを記し、異文化との出会いにおいてどんな表現で記述したかを見てみる。

ゴンザは出航時10歳の少年で、1728年、父と共に薩摩から大阪に向かう商船に乗り組んで遭難した。7か月の漂流の末カムチャツカに漂着した際、乗員のほとんどは原住民に殺され、生き残ったのは、35歳の商人ソウザと11歳のゴンザだけであった。この2名は、ペテルブルクに送られ、洗礼を受けた。当時の女帝アンナ・ヨアノヴナは、将来日本との外交・交易を行うことを望んでいたことから、通訳養成のための日本語学校を創設し、ゴンザを教師として任命した。ゴンザはロシア語の上達も早く、神学校での成績も優秀であったという。ただ、ゴンザはまだ少年であったため、年長のソウザに教えられることも多かったと思われる。1736年にソウザが死亡した。ゴンザはその直後から、現在残っている6種の著作にとりかかった。その指導に当たったのが、科学アカデミーの司書補であり、ゴンザが来てからは日本語学校の校長となったボグダーノフである。ボグダーノフは教養があり、ラテン語にも通じていたことが、ゴンザとの共同作業でも明らかである。

ゴンザの著作は、ボグダーノフが書いたロシア語を母語である薩摩の言葉に訳したものであ

る。現在も手書きの原本がサンクトペテルブルクの東洋学研究所に保存されており、それらのマイクロコピーが鹿児島県立図書館にある。短期間に集中的に執筆を行ったゴンザは、これらの著作の完成と同時に、1739年、21歳で世を去った。

大黒屋光太夫は、1782年、32歳のときに江戸に向かう船の船頭として伊勢の港を出帆した。この途中で時化に遭って漂流し、8か月後にカムチャツカ東の小島に漂着した。その後、カムチャツカ、シベリアを経てペテルブルクに赴き、女帝エカテリーナⅡ世に拝謁して帰国を願い、許されて、1792年、アダム・ラクスマンの率いるロシア船で帰国した。ロシア滞在中および帰国許可に当たって力になったのは、アダムの父キリル・ラクスマンであった。日本に上陸したのは、光太夫と磯吉の2名のみで、一行のうちの2名は洗礼を受けてイルクーツクに残り、他の13名の乗員は、漂流中や現地、また日本への上陸直前に死亡した。光太夫は帰国後、幕府の命で一生を江戸で送った。その間に、蘭学者と交わったり、桂川甫周の聞き書きによる『北槎聞略』への語りを行った。アダム・ラクスマンは松前で日本の役人と国交を開く目的の交渉を行ったが受け入れられず、帰国した。

タターリノフは前述したように、南部の港を出帆して遭難し1745年に漂着した徳兵衛一行の三之助の息子である。大黒屋光太夫が帰路イルクーツクに立ち寄った折りに、やはり南部漂流民の久助の息子であるトラベズニコフに会っている³⁾。トラベズニコフはアダム・ラクスマンと行を共にしている。

4. ゴンザ、タターリノフ、光太夫の記述の特徴

4-1. 使用した日本語の特徴

このような背景の中で生まれたゴンザと光太夫の著作の共通点と相違点を概観すると、次のようにまとめることができる。まず共通点は、自身の生活や文化と異なる事物に接したとき、それらを表現する言葉を、ロシア語の音に似せて書き表す場合と、自分の持っている日本語の単語で置き換える場合との両方があることである。一方二人の相違点は、ゴンザがロシア語からの薩摩語訳に徹したのに対し、光太夫は自分の言葉で記録し、語った点である(ただし文体は文語体)。本稿で用いる亀井・村山(1965)には、光太夫自身の記述やスケッチの写真も多く挿入されている。表記法は、ゴンザは当時のロシア文字(わずかに漢数字が見られる)で書いているのに対し、光太夫の筆跡を写真で見ると、漢字・平仮名・片仮名の達筆となっている。

次にゴンザとタターリノフの記述についても簡単に比較しておくと、共通点は、ロシア語と日本語の対訳であることであり、相違点としては、ゴンザが薩摩語の普通体をロシア文字で記しているのに対し、タターリノフは、南部方言の特徴の見られる日本語を、丁寧体で、ロシア文字・平仮名を用いて記していることが注目される。ゴンザの訳文には逐語訳が見られるのに対し、タターリノフの方は逐語訳はなく、自然な語順である。

上で、ゴンザはボグダーノフのロシア語を薩摩語に訳したと述べたが、そのボグダーノフは、2種類の書において、17世紀チェコの教育学者コメニウスのラテン語からのロシア語訳を行っ

ている。『日本語会話入門』と『世界図絵』である。コメニウスは、「すべての人に、すべてのことを、楽しく学ばせよう」という汎知学の提唱者で、その著『大教授学』で知られている。『日本語会話入門』の原著は、JANUAE LINGUARUM RESERATAE VESTIBULUM (『開かれた言語の前庭』藤田訳 1991b) で、ラテン語学習を、堅苦しい文法の暗記から解放させたものとして評価されている。また『世界図絵』(井ノ口訳 1995 がある)は子供向けのラテン語教科書である。この2書はコメニウスの初めてのロシア語訳と思われる。他の4書も底本があったと思われるが、これはまだ明らかでない。

ここで起こってくる一つの疑問は、ボグダーノフは、なぜコメニウスの著を原著として用いたのかということである。その答えはおそらく、当時の教養層はラテン語によって西欧の思想を取り入れる風潮があったこと、コメニウスの教育観は、その著書の翻訳が短期間に多くの国で発行されるほどヨーロッパ各国に行き渡っていた関係で、司書であったボグダーノフの目にとまったこと、日本語の教科書のためにはコメニウスの汎知学と教授法が参考になったことの3点であろう。

ボグダーノフの文章は、教会スラヴ語で書かれている。国民詩人と言われるプーシキンが文語を改革し、現代ロシア語の模範となった言葉で作品を発表したのが19世紀初めである。ボグダーノフが、コメニウスの新しい教育観を取り入れながらも文語で記したことは、時代的には必然であったと言えよう。

以上のような成立事情を背景として著されたボグダーノフとゴンザの共同作品においては、異文化における宗教や生き方をゴンザがどうとらえたかを窺う手がかりをいくつも発見することができる。

また光太夫の方も、見聞したことを感情を交えずに客観的に述べているのであるが、その中に、初めて接したキリスト教に関する用語を、すでに出来上がっている自分の日本語のどこに当てはめていくかを観察できて興味深い。

ここで、ゴンザおよび光太夫のロシア語の力はどうであったかについての研究を紹介しておきたい。まずゴンザについては、ボンダレンコ (1995 p. 143) は、ゴンザの著作を調べた結果、「当時の教養の高いロシア人のレベルのロシア語と教会スラヴ語とをマスターしていたことを示している」「権左が若くして亡くなった頃には、もはやかれは、母語の日本語よりもロシア語の方をよく知っていた」と結論づけている。ゴンザがボグダーノフの書いたロシア語を正確に理解して薩摩語訳していること、ただしその薩摩語訳は統語の上では不完全な部分があることを考えると、この結論は当たっていると思われる。

次に大黒屋光太夫については、村山 (1965b pp. 3-4) は、光太夫がロシア語の単語を片仮名表記したことについて、「聞略のロシア語資料は、ロシアにおけるロシア語の実際の発音状態を反映しているのであって、実に貴重といわなければならない」と評価している。また村山は(同書 p. 4)、光太夫がペテルブルクで「欽定全世界言語比較事典」の改訂の仕事に関与したこと、帰国後江戸でロシア語を教えたことも、彼の言語学上の功績であるとしている。

4-2. 項目の分類方法から見たキリスト教や生き方に関する用語の位置づけ

個々の用語を見るに先立って、コメニウス、ボグダーノフ・ゴンザ、光太夫は、それらの語を、語彙全体の中でどう位置づけているかを概観しておきたい。用いる資料は、内容で分類しているもので、コメニウスについては3種のラテン語教科書、ボグダーノフ・ゴンザについては『項目別露日単語集』と『世界図絵』、光太夫については『北槎聞略』である。

これらは、多くの分類項目を立てて、その中で宗教や生き方についての項目を出す部分を限定しているものと、いたるところにそれらを示しているものとに分かれる。

(1) 項目立てが明確で、出てくる部分が限定されているもの

① コメニウス『開かれた言語の扉』（1631年刊。藤田訳 1991a による）

これは100分野1000項目から成っていて、すべて文の形で示されている。100分野は、「入扉」「天空」「宇宙の生成」のように続いていく。これらのうち、宗教や人間の生き方に関する項目は次の22か所である。

意志・感情 夫婦・婚姻 子の出生 親族 寺院 教会 異教徒・ユダヤ教徒の迷信
犯罪人・刑罰 倫理学 思慮 節欲 純潔 中庸 勇気 忍耐 平常心
友愛・人間愛 真摯 閑暇 死・埋葬 神慮 天使

② コメニウス『世界図絵』（1658年刊。井ノ口訳 1995 による）

150章から成り、これも文の形である。該当の章は次の13章。

神 人間の魂 人間性 正義 結婚 埋葬 宗教 異教 ユダヤ教 キリスト教
マホメット教 神の摂理 最後の審判

③ ゴンザ『項目別露日単語集』

ロシア語と日本語(薩摩語)の対訳辞書で、40分野1269語を収録してある。該当箇所は次の7分野である。形容詞や動詞の中にも該当の語が含まれている。

神と聖霊 人間 病気 親類 裁判 形容詞 動詞

④ 大黒屋光太夫『北槎聞略』巻の十一(亀井・村山 1965 による)

この巻は、片仮名表記のロシア語と漢字・平仮名・片仮名を用いた日本語との対照表である。17分野に分けた中で、次の4分野に宗教や生き方についての語が含まれている。

鬼神 人倫 身体(附人事) 言辞

(2) 半分以上の分類箇所に宗教や生き方に関する語が含まれているもの

① コメニウス『開かれた言語の前庭』（1633年刊。藤田訳 1991b による）

この書は、上記『開かれた言語の扉』を、より簡略に初学者向けに編集されたものであり、9章427項目から成り、すべて文の形をとっている。章の中の細分類も数えると、24分野のうち13か所に該当の語が見られる。

② ゴンザ『日本語会話入門』

上の書のロシア語訳・日本語(薩摩語)訳で、20章から成り、すべて文の形。該当の箇所は13章。

③ 大黒屋光太夫『北槎聞略』（亀井・村山 1965 による）

巻之一から巻の九までは 16 章に分かれて文章で記述されており、多くの箇所に宗教や生き方についての記述が見られる。

以上概説した項目立てを見ると、次の点に気づく。

(1) 辞書の形式のものでは、宗教や生き方に関する語が出てくるところが限られている。これは、百科事典の項目立てに共通するものであるが、コメニウスの「すべてのことを」の思想が生かされているとも解釈できる。

(2) コメニウスの『開かれた言語の前庭』と、そのロシア語訳・日本語訳である『日本語会話入門』は、いたるところに、神について、また人間の生き方についての記述が見られる。人間の根本的な部分を扱うことによって、語学だけでなく宗教や道德の教育も目指していたと考えられる。

4-3. 訳語から見た特徴

最後に、ロシアの宗教や生き方に関する個々の語の日本語訳を見ながら、漂流民たちがロシア語をどんな日本語としてとらえていたかを探してみたい。本稿末尾に、それらの語について、ゴンザの『項目別露日単語集』と『新スラヴ・日本語辞典』、タターリノフの『レクシコン』、大黒屋光太夫の『北槎聞略』の 4 種対照表を付けた。このほかゴンザの『日本語会話入門』、タターリノフの『レクシコン会話篇』にも同じような訳語が見られるが、この表では割愛した。表記は、視覚的な把握のしやすさを重視して片仮名表記とする。ゴンザについては村山(1965a)および上村(1998b)、タターリノフについては村山(1965a)、光太夫については亀井・村山(1965)の表記を用いる。訳語の特徴を見ると、自分の文化にない概念を日本語でどう表すかについては、大きく分けて 4 通りあることがわかる。以下にそれぞれを示していく。

(1) ロシア語のまま、原語の音に似せて示しているもの

ゴンザ: イイススチ(イエス)、イエリンジン(エリン人、異教徒)、イエツヴァチ(エヴァ)、イエデムユトコル(エデンという所)、イエロサリム(エルサレム)、クリストスチ(キリスト)、クリスティアンジン(キリスト教徒)、イドルチ(偶像)、ユダチ(ユダ)、ユディジン(ユダヤ人)、ヨルダンチュカワ(ヨルダンという河)

光太夫: キリストヨイ(キリスト)、ボンマーテレといふ婦人(聖母)、ムスクワ(モスクワ)、ペートルボルグ(ペテルブルク)など地名・人名多数。

タターリノフは語例が少なく、この表には出てこない。キリスト教徒のことは『日葡辞書』でも Padrexu (伴天連衆)、Christaoxu (吉利支丹衆)のように原語に近い音を表している。ゴンザの例に多く出てくる「チ」は、「～という」の意で、説明する意図の表れと見ることができる。

この項に属する語はほとんどが固有名詞である。ただ、それぞれの書全体では二人で違いが見られる。ゴンザの場合は日本語に訳した語が多いのに対して、光太夫の方は、固有名詞はも

ちろん多数記されているが、そのほかロシア独特の事物を多く取り上げ、原語に近い片仮名表記をしていることである。その理由としては、ゴンザの場合は辞書(と会話集)で、ボグダーノフが意図したのは通訳をするに際して必要となる語を盛り込むことだったため、ロシア語で間に合うものはあえて取り上げなかったのであると考えることができる。一方、光太夫は見聞きしたすべてのことを詳細に記録する中で、ロシア独特の事物はそのまま片仮名表記にして示したのであろう。『北槎聞略』からいくつか例を拾うと、次のような語が見られる。

スタチキイ(魚の名)、ヤゴテ(草の名)、ヲレン(動物の名)、カンパルシカ(計器の一種)、キビツカ(櫓に乗せる輿のようなもの)

(2) キリスト教の用語を仏教関係の用語で訳しているもの

① 「神」を表す語は、ゴンザはフォドケ、タターリノフはフォドゲとしている。ゴンザがカミと言うのは、「聖霊」のここのようである。ラテン語『日葡辞書』、ロドリゲスは Deus である。『日葡辞書』によると、Fotoqe は日本人が救霊を願う偶像、また時にはただ釈迦の意に用いる語であり、「カミ」は日本のゼンチョア(異教徒)が尊崇する神を言う。ザビエルは布教の初期、「大日」を用いたということである。

② 「靈魂」はゴンザによるとイキである。『日葡辞書』は Rei, Reicon、ロドリゲスは Anima で、どちらにも「イキ」に靈魂の意味はない。

③ 「聖霊」を表すのにゴンザはカミ、イキ、フォドケカミノイキ、タターリノフはフォドゲノイギを使っている。日葡辞書では Iqi には聖霊の意味はない。

④ 「寺院」は、ゴンザもタターリノフもテラであり、光太夫は寺院・寺、建物は仏殿である。『日葡辞書』では、Tera は Bonzo の僧院あるいは寺、Ii-in (ジイン)は寺の境内にある Bonzo 個人の礼拝所あるいは住居を指す。Bonzo とは「凡僧」つまり位のない普通の僧であるという。

⑤ 「僧正」はゴンザもタターリノフもオショ。『日葡辞書』で Voxo は Bonzo のある位。

⑥ 「僧侶」は、ゴンザはボズ、光太夫は僧、住僧。光太夫によると、葬礼のときには導師も使う。『日葡辞書』では、Doxi は指導者のことである。

⑦ 「礼拝」は、ゴンザは朝の礼拝をネンキン、晩の礼拝をバンノツトメとしている。ネンキンは念経の意。Tcutome は『日葡辞書』では経を読んだり祈りをするを言う。

⑧ 「供養」は、ゴンザはトモレ、光太夫は法会・年回である。「供養」は村山の使った語であるが、確かにキリスト教関係の語でこの意味を表すのに適当なものが思い当たらない。『日葡辞書』によると、Tomurai は葬儀にも、供養や法事にも用いる。現代鹿児島方言でもトムレは葬式も法事も表す。

⑨ 「祈祷する」は、ゴンザは単にオガム・オガミスルとしているが、光太夫は、念仏誦経す・誦経すのように、仏教用語をそのまま使っている。

⑩ 「神聖な衣服」を、ゴンザはケサ、タターリノフはテラサキリモノ、光太夫は僧衣と訳している。

⑪ 「聖像」はゴンザと光太夫に共通で、ゴンザはカケイエ、光太夫は掛版(かけゑ)である。

なお光太夫は仏像の掛版とも訳している。「席(ざしき)に掛たる仏像を拝し」という記述もある。

⑪ 「救世主」をゴンザはオシャカと訳している。救いをもたらすという意味でこの語を使ったのであろう。『日葡辞書』の Xaca は釈迦個人を指している。

ゴンザも光太夫も、キリスト教に関する語を自分になじみのある仏教用語に訳していて共通のものも多いのであるが、この二人で異なるところも見られる。それは、ゴンザは日常的な仏教用語を使う傾向があるが、光太夫の方は純然たる仏教用語に置き換えているものが多い。その理由は、一つには二人の年齢の違いによると思われる。日本で成人して教養を身につけた光太夫と、子供のときに日本を離れたゴンザとでは、使える日本語が異なることは容易に想像がつく。もう一つの理由としては、光太夫は日本に帰国することを強く望んでそれを実現させたくらいであるから、異国の風物を観察し記録しても、日本人としてのアイデンティティは保持していたためと考えられる。

(3) キリスト教の用語を、日本の習慣を表す語で代用させているもの

「祝日」「聖日」「安息日」をゴンザはシェクノフィとしている。『日葡辞書』によると、Xekku (節供)は元日、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日を指す。「聖日」を光太夫は祭日(まつりび)と言っている。

(4) キリスト教の用語を、一般的な語で表しているもの

これはゴンザに多く見られる。「キリストの再来」をゴザッタコト、「偽説教者」をウソシショ(嘘の師匠)、「布教する」ことをスヨユ(すべてを言う)、「予言者」をサキユフト(先に言う人)、「寺の葡萄酒」をヨカサケ(良い酒)、「悪しき信仰」をワルスルコト、「聖油」をカタシノアブラ(椿の油)、「慈悲をかける」をムゾガル、「教父・名付親」をデスルフト(代わりをする人)、「教母」をデスルオナゴ、「懺悔」をトガユコトなど。光太夫では、「教父、教母」は義父(かりおや)・名付親、義母(きは)、義父母(かりおや)であり、「懺悔」は懺悔(さんげ)と仏教用語になっている。

「慈悲をかける」を、ゴンザはムゾガルと訳しているが、この語は「可愛がる」の意で現代も使われている。『日葡辞書』では Muzan (無慙。同情・憐憫の意)、Muzona (同情の心をそそるような)、などと出ている。またこの語はロドリゲスでは、Muzogaru (憐れむ)である。

また、この項のゴンザの訳語を見ると、日常使う語で代用する傾向があることがわかる。それに対して、光太夫は適切な表現をしていて、年齢や教育の違いが見られる。

そのほか、一般的な用語とは言えないかと思われるが、日本独特の語に置き換えたのが、「悪魔」をゴンザがガワツパ(河童の意)、タターリノフがカッパと訳している場合である。キリスト教で言う誘惑する悪魔を、いたずらをする河童に置き換えたわけであるが、その根底には、前述したような中世のロシアの悪魔崇拝とも関係があるとも考えられる。ボグダーノフおよびゴンザが、悪魔に対してどんなイメージを持って記述したのかを知ることが必要である。

またロシア独特⁴⁾と言える「婚礼」をゴンザがゴジェムケ(御前迎え)と訳したのは、日本語

にも「嫁取り」「嫁にもらう」という表現があるくらいであるから、違和感はなかったのであろう。

以上は不十分な考察であるが、漂流民による記述の一端からでも、異文化と出会ったときに、そこに自分をどう位置づけるかを知るための示唆を得ることができることがわかった。ここに取り出さなかった語の中にも、この目的に合ったものは多いはずである。より詳細な調査が必要である。

5. まとめと今後の課題

上で見てきたように、18世紀のロシアに漂着した人々の中には貴重な記録を残したゴンザや光太夫のような人物があり、その記録は多方面の研究に役立つことがわかった。今回取り上げたキリスト教や人間の生き方に関する語の訳語は、彼らの日頃の生活のうち特に精神面がどうであったか、そして異文化をどうとらえたかを知るための一つの指針となっていると言えることができる。ロシアのキリスト教や人間の生き方を見て、それらのほとんどを自己の世界の中で処理しようとしたのが光太夫であり、一方それらを自分の生活の一部としたのがゴンザであったと言ってよいであろう。この二人では、年齢、教養のつけ方、ロシアに対する態度などが異なっていることを反映していると思われる。ロシアで生まれたタターリノフはゴンザに近い。

本稿の今後の課題としては、ロシア資料の発掘と検討、ロシアでの漂流民の精神面の変化、漂流民が接した人々の階層と宗教などについての資料を補強し、彼らの記述の意味を正確にとらえていくことが考えられる。

この問題の研究は、言語、歴史、地理、海洋、社会、宗教、政治、外交、教育などさまざまな分野にわたって行われる必要がある。

今後、ロシアと日本との共同研究が活発に行われることを期待したい。

注

- 1) 伝兵衛については1700～1701年にアトラソフがシベリア庁に提出した「カムチャッカ遠征に関する第一の報告」および「第二の報告」、サニマについては1712年にコズイレフスキーの「岬すなわち海峡までの経路と海峡向いの島々について」（いずれもロシア語）がある。
- 2) 「山アテ」とは、古代以来の伝統技術で、沿岸の山(岬、断崖、禿地、大樹なども)を目標にして航海するもので、それらの山や樹木には航路の目当てとなる不思議な霊が宿っているとして、漁民の信仰の対象となった(北見 1984 pp. 300-305)。
- 3) 『北槎聞略』に題材を取った井上靖『おろしや国酔夢譚』（1991年刊。徳間文庫）によると、大黒屋光太夫はシベリアからベテルブルクに行く途中で、イルクーツクでタターリノフとトラベズニコフに会ったことになっているが、『北槎聞略』では帰路に、トラベズニコフに会ったとなっている。
- 4) ロシア語では、「結婚する」のような一般的な表現でなく、「男性と結婚する」か「女性と結婚する」のどちらかを使う。

参考文献

網野善彦(1998)『海民と日本社会』 新人物往来社

- 井ノ口淳三訳(1995)『J. A. コメニウス 世界図絵』 平凡社
- 亀井高孝・村山七郎編(1965)『北槎聞略』 吉川弘文館
- 上村忠昌(1997)『修訂 ゴンザ『日本語会話入門』(村山七郎著『漂流民の言語』所載)』(コピー)
- 上村忠昌(1998a)「ゴンザ『項目別露日単語集』について」『鹿児島工業高等専門学校研究報告』 33
- 上村忠昌(1998b)『復元 ゴンザ『項目別露日単語集』(ロシア科学アカデミー本による)』(コピー)
- 北見俊夫(1984)「海の道・川の道——内陸水路と海路の様態——」『日本民俗文化大系 第6巻 漂泊と定着——定住社会への道——』 小学館
- 白石治朗(1997)『ロシアの神々と民間信仰 ロシア宗教社会史序説』 彩流社
- 野口武徳(1983)「船霊とエビス」『日本民俗文化大系 第5巻 山民と海人——非平地民族の生活と伝承——』 小学館
- 日野資純(1988)「タターリノフの『レクシコン』等所収の青森方言と現代方言」『方言誌あおもりけん』 青森・方言研究会
- 藤田輝夫訳(1991a)『J.A. コメンスキーの「開かれた言語の扉」(私家版)』
- 藤田輝夫訳(1991b)『開かれた言語の前庭』(私家版)
- ボンダレンコ・イ・ペ(1995)「権左の手稿遺産におけるかれのロシア語の語彙の反映」『京都産業大学国際言語科学研究所 所報』 17-1
- 村山七郎(1962)「ア・タターリノフの「レクシコン」の東北方言について——オ・ペ・ペトロワさんに与える——」『国語学』 52
- 村山七郎(1963)「ア・タターリノフの「レクシコン」の会話篇」『国語学』 55
- 村山七郎(1965a)『漂流民の言語——ロシアへの漂流民の方言学的貢献——』 吉川弘文館
- 村山七郎(1965b)「大黒屋光太夫の言語学上の功績」『北槎聞略』 吉川弘文館
- 村山七郎(1985)『ゴンザ編 A.I. ボグダーノフ指導 新スラヴ・日本語辞典 日本版』 ナウカ
- 森田武編(1989)『邦訳 日葡辞書 索引』 岩波書店
- 守屋毅(1987)『民衆宗教史叢書 第19巻 金比羅信仰』 溪水社

宗教および人間の生き方に関する訳語一覧表

	項目別露日単語集	新スラヴ・日本語辞典	レクシコン	北槎聞略
愛する	スイチョル			
悪魔	ガワツパ	ガワツパ、マモン	カツパ	
朝の礼拝	ネンキン	ネンキン		
悪しき信仰、無神論		ワルスルコト		
尼寺				尼寺
安息日		シェクノフィ		
イエス		イイススチ		
生きた	イキタント	イキタト		
異教徒		ヨソソフト、イエリン ジン		
異教徒寺院		オガムトコル		
異教の、異教徒の		コソクニノト、イエ リンノト、イエリンノ		
生贄を祭ること		マツルコト		
隠遁者、天人		テンニン		
永遠の	イチデント			
エヴァ		イエツヴァチ		
エデンの園		イエデムユトコル		
エルサレム		イエロサリム(チュ トコル)		
鐘の音		カネンオト		
神	フォドケ	フォドケ、カミ	フォドゲ	
神の国		フォドケノクニ		
神の心		フォドケノココロ、フォド ケンクマシ		
神の出現せる		フォドケノミイエヤツタ		
神の姿		フォドケシナイ		
神の宣教者		フォドケンシルフト		
神の賜った物		フォドケンタモッタモン		
神のつくりたる物		フォドケンシャッタモン、 ツクックモン		
神の罰	バチカプル フオド ケン	バチ、バチカプル		
神を愛する		フォドケヲスク		
神を拝む		フォドケヲオガム		仏像を拝す
神を恐れる人		フォドケヲオトロシガル フト		

	項目別露日単語集	新スラヴ・日本語辞典	レクシコン	北槎聞略
棺	ガン	ガン		棺、臥棺
祈祷		オガムコト		
祈祷所		オガムトコル		
祈祷する		オガミスル、オガム		念仏誦経す、 誦経す
救世主	オシャカ			
教化する		フカラカス		
教義				教法
教父、名付け親		デスルフト		義父(かりおや)、名付親
恐怖させた	オトロシカモン			
教母		デスルオナゴ		義母、義父母 (かりおや)
玉座	デザ	タッカトコル		
キリスト		クリストスチ		キリストライ
キリスト教徒		クリスティアンジン		
偶像		イドルチ		
偶像崇拜		イドルイ オガムコト		
供養、法要	トモレ	トモレ		法会、年回
結婚する		ニュボモツ		
香脂	ズインコ			
香炉	コロ			
婚礼	シュキ	ゴジェムケ		婚儀、婚姻
懺悔する		トガユ		懺悔(さんげ)
寺院	テフ	テフ	テフ	寺院、寺、仏殿
地獄	ヂゴク	チゴク、イチデンフィ		
地獄の火		フィヂゴクノト		
仕事する日	シゴトスルフィ			
司祭		ボズ		住僧
死せる	シンダント	シンダト、シンダント		
死人	シンニン	シンニン		
死ぬ		シヌル、イキガキユル		
慈悲をかける	ムゾガル	ムゾガル		
週	ナンカ			
十字架		マブイ		十字架(じうもんじ、はりつけはしら)

	項目別露日単語集	新スラヴ・日本語辞典	レクシコン	北槎聞略
十字架にかける		ファテカタル		
修道僧		ボズ		
祝日	シェクノフィ			
神聖な衣服	ケサ		テラサキリモノ	僧衣
神聖なもの、聖人		カミ		
死んだ日	シンダファイ			
新婦		ヨメ		新婦(よめ)
新郎新婦				両新人(はなむこはなよめ)
聖日				祭日(まつりび)
聖水	ファナミツ			
聖水をふりかける		ミヅマツル		水を漕ぎかける (改宗の場合)
聖像	カケイエ	カケイエ		掛版、仏像
聖像破壊		オガマンフト		
聖像礼拝		オガムコト、テイデ スルコト		
聖物を冒瀆する		ワルカコト ユ		
聖母		フォドケノオナンコ		ボンマーテレ といふ婦人
聖油		カタシノアブラ		
聖霊なる神	フォドケカミノイキ	イキカミノ、カミノイキ	フォドゲノイギ	
全能なる		スユナルトン		
洗礼		マブイカクルコト		水に浸す
洗礼を受けていない		マブイカケント		
総主教		オシヨ		大僧正
僧正	オシヨ			
創造者		ツクルフト、シェケツ クルフト		
僧侶	ボズ	ボズ		僧、住僧、導師
葬礼				葬礼
魂	タマシ	タマシ		
魂を破滅させること		タマシスツルコト		
誕生日	タンジョニチ	タンジョニチ	フォドゲトト	
父なる神	フォドケトト		フォドゲトト	
長老制度		ボズスルコト		
つき鐘	ツキガネ	ツキガネ、カネ	ツギガネ	時の鐘、鐘

	項目別露日単語集	新スラヴ・日本語辞典	レクシコン	北槎聞略
つき鐘堂	ツキガネド	ツキガネド	ツキガネド	鐘楼(しゅろう)
罪、責任		トガ		
罪を犯す		バチカブル		
寺男	コズ	コズ		
寺の葡萄酒		ヨカサケ		
天	クモ	クモ		
天上の神	クモノカミ			
天の		ウイェント、クモント		
到来、キリストの		ゴザッタコト		
再来				
内陣				堂奥・内室 (ないちん)
偽説教者		ウソシショ		
媒酌人	チュダチ	チュダチ、ナカドイ		媒酌(なかふど、 なかだち)
墓掘り人		ファカフォイ		
晩の礼拝	バンノツトメ	バンノツトメ		
火の地獄	フィノヂゴク	フィヂゴクノト		
布教する		スヨユ		
葬る		オクイスル		
埋葬する	オクイスル	オクル、オクイスル		埋葬
祭り	マツイ			
祭る		マツル		
婿				婿
息子なる神	フオドケムスコ		フォドゲムスコ	
ユダ		ユダチ		
ユダヤ人		ユディジン、イエブレ ジン		
予言者		サキユフト		
予言する		サキユ		
世捨人	チェンネン			
ヨルダン河		ヨルダンチュカワ		
霊魂	イキ	イキ		